

坂口安吾

村のひと騒ぎ



村のひと騒さわぎ

その村に二軒けんの由緒ゆいしよ正しい豪家ごうかがあつた。あいにく二軒も——いや、二軒しか、なかつたのだ。ところが、寒川家の婚礼こんれいという朝、寒原家の女隠居おんないんきよが永眠えいみんした。やむなく死んだのであつて、誰だれのもくろみでもなかつたのである。ことわつておくが、この平和な村落では誰一人として仲の悪いという者がなく、慧眼けいがんな読者が軽率けいそつにも想像されたに相違そういないように、寒川家と寒原家とは不和であるという不穏ふおんな考えは明らかに誤解であることを

納得なっとくされたい。

寒原家の当主というのは二十二三の極めて気の弱い男であつた。この宿命的な弱気男は母親が息を引きとるとたんに、今日はこの村にとってどういふ陽気な一日であるかという気懸きがりな一事を考えて、よほど狼狽ろうばいしなればならなかつた。つまり、ひどく担かつぎやの寒川家の頑固がんこじじいを思い泛うかべてゴツンと息をのんだのである。

「お峯みねや……」と、そこで彼は長いこと思案してから急にこう弱々しい声で女房にようぼうに呼びかけたが、彼の顔色や肩かたのぐあいや変なふうにびくついている唇くちびるをみると、彼

もよほどの決意を堅かためたということが分るのである。「お前はこういうことに大変くわしいと思うのだが、あのねえ、お峯や、高貴な方には一日ばかり発喪はつもをおくらすと、いうことも間々まあるように言われとるが……」

ところが、めざとい女房は夫の魂胆こんたんをひどく悪く観察してしまった。とはいうものの、もちろんそれは半分凶星であつたには違ちがいない。寒原半左衛門はんざえもんはだらしのない呑のみ助であつた。ことに他家よその振舞酒ふるまいざけをのむことが趣味しゅみになつていた。おまけに、およそ能のないこの男だが金輪際こんりんざいたつた一つの得意があつて、村の衆あやに怪しげ

な手踊ておどりを披露するこの重大な一事にほかならなかつたのだ。全身にまばゆい喝采かつさいを浴びたこの幸福な瞬間しゅんかんがなかつたとしたら、彼はとうの昔に首でもくくって——いや、これは失礼。極めて小数の人達しか知らない悪い言葉を私はうっかり用いたのである。

「おや、この人は変なことをお言いだよ」と、そこでお峯こわは怖い顔で半左右衛門を睨にらみつけた。「胸に手を当ててごらん！ わたしたちは高貴な身分どころではありませんからね！」

弱気な半左右衛門が脆もろくもぺしやんこになったのは言

うまでもない。

事の起りについては医者が悪いという意見が専ら村に行われている。もちろん彼の腕前うでまえについての批難ではない。彼の注射は早くから評判が高かったので、どんなに熱の高い病人でも譫言うわごとや悪夢あくむのなかで注射の針を逃げまわっていた。だから、その方面の間違ひは決して起るはずがなかったのだ。問題は彼の口である。すなわち、前段で述べたような会話がまだ寒原家の一室で取り交わされれている時分に、この宿命的な不幸はもはや村一面に流布るふしていた。もし彼の口さえなかったとしたら——弱

気な、そのうえ酒と踊に異常な情熱をもった諦あきららめの悪い半左右衛門は、思い出してはねちねちと拗すねて、短い秋の一日ぐらいはどうなったか知れたものではない。

さて、事の意外に驚おどいたのは、まず森林寺の坊主ぼうずであった。今宵こよいの祝宴しゆくえんに狙ねらいをつけた最大の野心家はこの坊主であったかも知れない。言うまでもなくこいつは呆あきれた酒好きであった。おまけに、坊主というものは宴席で誰よりも幅はばの利く身分であって、「てへへん、これは結構はんな般若湯にやとうでげす。やれやれ、わしどもの口には二度と這は入いるまい因果やっな奴やつでな」なぞと言うことによつて、

一升しやうや二升のお土産みやげは貰もらえる習慣のものである。ところへ寒川家のおやじとききては實際氣前が良かったのだ。ところどころが一朝通夜つやとききたひには——するど鋭い読者はもはや充分見抜じゆうぶんみぬかれたに相違あるまいが、寒原半左右衛門ときては近在ま稀れなけちん棒であった。拙とつ！ ところで不可解至極な通念によれば、坊主というものはこの際婚礼をおいて通夜へ廻まわらねばならないという信じ難い束縛そくばくのもとに置かれていて！ こうして、森林寺の坊主が唐突とうとつとして厭世的煩悶えんせいはんもんに陥おちいったことには充分理由があつたのである。

生れつき煩悶には不慣れな性質だったので、肥満した彼の身体からだは内心の動揺どうようをうまく押えたり隠かくしたりできなかった。つまり彼の逞たくましい腕はいきなり彼の胸倉むなぐらを叩いたり、あまり勝手が違いすぎて施ほどこす方法がなかった。ので、舌を出したりしたのである。が、劇はげしい努力の結果として会心の解決が彼を突然雀躍とつぜんこおどりさせた。身体がいつぺんに軽くなった思いがした。そこで彼は大急ぎで小僧こぞうを呼び入れたのだ。

「頓珍とんちんや。これや。もそつと前へ坐すわれや。よろこべよ。今夜はお前に一人前の大役を授けるぞよ。（とここう言っ

たとき、坊主は思わず嬉しさにニタニタと相好を崩した。わしは今夜は大切な用向きがあつてな、昼うちだけ寒原さんへお勤めに行くよつてな、お前は今夜わしの代役でお通夜の主僧とおいでなすつたぞよ。ありやありや、どうじゃな、てへへん、嬉しくて有難くつてこつたえらんところだろうが……」

と、こう言われた小僧は当年十四歳であつた。もちろん生れた時から数えてのことで、小僧になつてから十四年も劫を経たわけではなかつたのである。勘の素早い小僧はむつとした。それから、前垂れで頬つぺたをこすり

ながら、ひどく深刻な、むつかしい顔付をしたのである。
そして、

「わたしは、まだろくすっぽ、経文を知らんですがね
え……」と言った。

「なになに、ええわ、本を読みなされ」

「字が読めんです」

「この大とんちきめ！」と坊主は思わず怒鳴ったが、
大事の前で軽率な怒りから身を亡ほろぼしてはならないので
ある。そこで今度は教訓的な真面目まじめな顔をこしらえた。

「小僧というものはな、習わん経文も読まねばならんも

んだぞよ。うへん、ま、仕方がないわ。知つとるだけの
 経文を休み休み繰り返しておきなされ。WAH！　こう
 していられん！　WAH！　これよ。衣をもてよ」とこ
 う叫ぶとあたふたと着代えをして、「頓珍や、よろこべ
 よ、今夜はお前も結構な御馳走ごちそうをおよばれじやよ。夕食
 の仕度したくはいらんぞよ」と大事な言葉を言い残して慌あわただ
 しく出掛でかけて行つた。と、そのとたん、ほとんど入れ
 違いといつていい宿命的な瞬間に、五十がらみの村の
 男——権ごんじゆう十と呼ばれる村の顔役が泡をくらつて跳とび込こ
 んできた。

「和尚おしょうさんはどうしたあ！　大變なことができちやった
い！　W A W A W A！　村は一大事じゃよ。和尚さんて
ば。水をくれえ。お茶がええ。……」

そこで小僧は和尚のたくらみに恨骨髓うらみこつずいに徹てつしていた
ので、和尚の運めぐらした不埒ふらちな魂胆を権十に洩もらしたので
ある。と、権十は和尚が不在の理由をきき、愕然がくぜんとして
顔色を変えたが、すこしも早く、OH！　そうだ、とい
う凄すこい見幕を見せると、わっ！　とも言わず和尚のあと
を追いはじめた——と、この出来事はこここのところ
有耶無耶うやむやになって、話はべつに村の一方の恐慌パニックへ飛ぶの

である。

まだ朝の十時頃ごろのことであつた。わが帝国ていこくの山奥やまおくに散在するこれらの村で、ちようどこの刻限がどんなに平穩な人生を暗示するかということとは想像したただけでも氣持のいいものである。とはいえ季節が秋だつたので、山もそれから山ふところの段々畑も黄色かつたり赤ちやけていたり、うそ寒い空の中へ冷たい枯枝かれえだを叩き込んでいたりした。いわば荒涼こうりようとした眺めながであつたが、それにもかかわらず田舎いなかはいつも長閑のどかなものだ。時雨しぐれが遠方の山から落葉を鳴らして走り過ぎて行くかと思つと、低迷し

たどす黒い雲が急にわれて、濃厚のうこうな蒼空あおぞらがその裂け目さからのぞいたりした。鈍にぶい陽射ひざしが濡ぬれた山腹の一部分だけさつと照らしているうちに、もうまた時雨が山の奥から慌てふためいて駈かけ出してくる。ちようどそういう時刻だった。わが勤勉な百兵衛は平樂山の段々畑の頂上から三段目を世話していた。すると、突然谷底くぼちの窪地くぼちから一つの黒い塊かたまりが湧わきあがってきてきて導火線を這はうように驀まっしぐら地にせりあがってきしたが、音もたてずに百兵衛の腰こしへしがみつくと二人は全く一つになって畑の中へめり込んでいた。そのはずみに百兵衛は脾腹ひばらを強したたか蹴けりあげ

られて、秋のさなかへあっさり悶絶もんぜつしようとしたが、すると異様な人物は、「とつつあんや、苦しかったらじつと我慢がまんしなよ。人は苦しくない時に我慢ということの出来んもんじやからな。村は一大事じやぞ！」とこう言つて苦悶の百兵衛を慰なぐさめたので、これが倅せがれの勘兵衛かんべえであることが分つた。

このような、いわば革命を暗示するような悲痛な動揺が、已すでに収穫とりのいれの終つた藁屋根わらの下でも、樵小屋きこりの前でも、山峡やまかの路上でも電波のように移っていった。実際のその瞬間に、ああこの村はどうなるのだと思わせたに違

いない。村全体が一つの重々しい合唱となつてちようど地底から響くように、「こうしちやあ、いられねえ。こうしちやあ、いられねえ」と呻いた。それから、村そのものが一つの動揺となつて、居たり立ったり空間の一ヶ所を穴ぼこのように視凝めたり、埋葬のようにゆるぎだしたり、じりじりと苛立ちはじめたりした。そこで、感^{やす}じ易い神経をもつた山の狸^{たぬき}や杜^{もり}の鴉^{からす}がどんなに勝手の違つた思いをしたかということ、彼等が顔色を変えて^す巢をとびだすと突然夢中に走りはじめたことでも分るのである。

全く、同情ある読者諸兄は彼等の心情に一掬いっきくの泪なみだを惜お
 しまないであろうが、彼等は今や一年に一度の、いや、恐おそ
 らく一生に一度かも知れたものではない山海の珍味ちんみを失
 おうとしているのだ。なるほどこれは残酷ざんこくだ！ もしも
 彼等がお通夜歸りに婚礼を訪れたとしたら、担ぎやの頑
 固じじいは家の子郎党ころうどうに棍棒こんぼうを握にぎらせて塵殺みなごろしにするま
 では腹の虫がおさまらないに相違ない。と行って、婚礼
 歸りのほろ酔よいで寒原の神聖を汚けがしたとなると、
 歇ヒステリ私テリ的里のお峯は悪魔あくまを宿して、初七日を過ぎないうち
 に借金の催促さいそくとなり、やがて一聯隊れんたいの執達吏しつたつりが雪ぢかい

寒村へおしよせるに違いない。

誰言うとなく、学校へ集まれという真剣しんけんな声が村の一方にあがった。これは金言のように素晴らしい思いつきの言葉だった。自分一人の心臓を（いや、胃袋いぶくろだ！）おさえきれずにいた幾百万いくひやくまんの（とは言え本当は人口二百三十六名である）村人は、血走った眼に時雨の糸が殴なぐり込むのを決して構おうとせず、息をつめて知識の殿堂でんどうへ殺到さつとうした。遠い山からそれを見ると、勤勉けんみんな蟻あり——物ものを考えたり声を出したりしないところの、あの匆忙そうぼうな行列けつじに酷似こくじしていた。この適例てきれいによってみれば、しばしば

人に強要されるところの時間正しさポクチュアルテと呼ばれるものは、
 全く一に無類の緊張きんちようによるほかは厳守しがたい美德の
 一つであることが分るのである。八方の山陰やまかげや谷底から
 現れたこれらの小粒こつぶな斑点はんとんは実際五分とたたぬうちに一
 つ残らず校門へ吸い込まれたではないか！ 村には今わ
 ずかに一人の人影を探し出すことも出来ない。そして荒
 涼たる秋が残った。

さて、この日はちょうど日曜日であつた。ところで、
 日曜日といえは、絶対的に、あるいは必死的にさえ学校
 へ顔出しを憎にくむところの誠実な先生達が、やはり必死の

意気ごみで駈けつけたというのは！　これは何んなとしたことなのだ。

村人は雨天体操場に集合した。そして一瞬場内が蒼白そうはくになると、職員室で密議を凝こらしていた村の顔役と教員がブロンズのデスマスクを顔にして黄昏たそがれをともないながら入場した。まず演壇えんだんへ登ったのは言うまでもなく校長である。彼は劇はげしい心痛のせいか、全くのぼせていたし、そのうえ細こまかく顫ふるえていた。というのは、一つはもちろん生れつきではあったが、一つにはあいにく寒川家には学齡期がくれいきの児童がなかったのに比べて、寒原家には大たい概がい

の組に子供がいた。この密接な関係からして、先生達はもちろん通夜へ！　しか！　出席する余儀よぎない立場にあつたのである。

「諸君！　何たることである！　（と、こう言う時に彼は早くも力一杯卓子を叩いっぱいたくしきつけた、が、あまり力がはいりすぎて、とたんに彼は茫然ぼうぜんとして自分自身の口を嚙つくんだ）　しかり！　何たることである！　（そして彼は水を含んだ）　実に何たることではないか！　彼女は死んだ！　驚いたではないか！　驚いた！　ほんとうに驚いたか！　本当に驚いた！　（と、こういう言葉に驚いた

のは彼自身であつた。彼は片側の重立おもだち連れんへ救いをもとめる眼差まなざしを投げた。しかし彼等は校長の言葉にもはや充分興奮しはじめていたので、彼の視線をむしろ怪訝けげんな表情でもつて見返した。校長は苛々いらいらして、しかし今度は悲痛な情熱をしぼると、眼さえ瞑つむつて絶ぜつきよう叫しはじめた——）親愛なる諸君！　そもそも人間は婚礼の日に死んでいいか！　否いな否いな否いな！　しかるに彼女は死んだ！　呆あきれかえつたではないか！　呆あきれた！　かりに諸君！　諸君は婚礼の日に死にたいと思ふであらうか！　断然否！　余はいかなる日にも死にたいとは思わないのであ

る！　しかるに彼女は死んだ！　ほとんど奇怪きかいではない
 か！　奇怪である！　余はなさけない！　余は營々とし
 て育英事業に尽瘁じんすいすることここに三十有余年、かくのご
 ときは真にはじめてのことではないか！　実にはじめて
 のことである！　しかりとせば諸君！　けだし三十有
 年目の奇怪事ではないか！　三十有余年前に果してかく
 のごとき事があつたか！　分らない！　しからは諸
 君！　開闢かいびやく以来の奇怪事かも知れんではないか！　W
 AH！　諸君！　日本が危い！　うっかりすると日本は
 危険だ！」

と、こう言われた時に満場の聴衆ちやうしゆうはドキンとした。それよりもドキンとしたのは校長自身であつた。彼は自分の結論に痛痛しく感激して劇しく胸をかきむしつていたが、突然身をひるがえして演壇を落下すると、ハラハラと涕泣ていきゆうして椅子いすに崩れたくず。あいにく偉大いだいな校長は当面の大事には何の名案も与えぬあたうちに感激しすぎたのである。つづいてざわざわと群衆の頭がゆれはじめた。まったく、たかだか二百三十六名で未曾有みぞうの国難をしようきることは心細いに違いない。荷の勝ちすぎた熱情は長続きのしないものだ。彼等の情熱はどうやら当面の村難

へ舞まい戻もどったのである。

そこで、芸術家の頭をした一人の青年訓導が、沈ちんちやく着くを一人で引受けた足どりで演壇へ登った。この騒動そうどうに落付おきといふこと、それだけでも已すに甚じん大だいな驚異きょういであるから、彼の姿を見ただけで、もう人々は重みのある心強さを感じた。

「みなさん！（と、彼はまず柔やわらかい言葉を用いた）今回の突然の出来事が未曾有の大事であることは偉大な校長先生のお話によって良くお分りのことと思います。が、婚礼くまの当日お熊くまさんが亡くなられた不思議な出来事

は已にしつかりした事実であつて、婚礼とお通夜と、あいにくこの二つは今更いまさらどうすることも出来ない。そこで、当面の問題として婚礼もよしお通夜もよしという便利な手段を考案しなければならのである。(とこう言つたとき満場はほとんど夢心持ゆめごころで同感の動揺を起した) 私はこう考えるのである、諸君！ (と、今度はきつい言葉を用いた) 婚礼は男女に関する儀式であつて、これは別に問題はないが、本日の亡者はお熊さんと呼ばれ、寒原半左右衛門の母であり、かつまた故一左右衛門の妻であつた事実からしても、私はこれを女と判断したいのであ

る。とすれば、我が国の淳良じゅんりょうな風俗によつても、これは必ず女が通夜に行かねばならん！ 亡者が女であるならば、何故女が通夜に行かねばならんか？ 何んとなれば、彼女が男であるならば男が行かねばならんからである。かつまた彼女が男であるならば男が行つたに相違ないではないか！ しかるに彼女は女であつた。故ゆえに女が行かねばならのである！ つまり、わが村の婦人はお通夜へ、わが村の男子は婚礼へ、行かねばならのである！」

と、こう結んで彼が降壇するとき、満場の男子は嬉うれ

しさのあまり思わず額をたたいたりして発狂はつきようするところであつた。が、まだ降りきらないうちに、数名の女教員いっせいが一斉に壇上へ殺到した。彼女等は口々に男性を罵ののしりながら、自分一人が演説しようとして、壇上で激しい揉もみ合いをはじめた。満場の男女は総立ちになつて、今にも殺伐さつぱつな事件が起りそうに見えたのである。もしも賢明けんめいな医者が現れなかつたとしたら、このおさまりは果してどうなつたか知れたものではない。

医者——この事件の口火を切つた医者——あの男は、軽率な口がわざわいしてこの日は国賊こくぞくのようになつて

いたが、決して悪い人間ではなかつたのである。注射——もちろんそれもある。しかし概がいしてこの場合には、注射それ自身の問題であつて、彼自身としては毫ごうも殺人の意志はなかつた。してみれば彼に全く落度はない。実際彼は善人であつた。そして、医学の方では諦あきららめていたが、医学以外のことでは村のために一肌ひとはだぬぎたい切実な良心を持っていたのだ。——そこでこの好人物は両手を挙げて騒然たる会場を制しながら壇上へ登つた。つづいて、くねくねした物慣れた手つきで摑つかみ合いの女教員を引き分けたのである。と、この深刻な手つきは、さす

がじょけつの女傑たちも啞然あぜんとして力を落してしまふほど、精神的魅力みりよくに富んでいた。そこで彼は踊るような腰つきでこ
う演説をはじめた。

「みなさん！ しずまりたまえ！ 不肖ふしょう医学士が演壇に

登りましたぞ！ 医学士が登壇したからしずまれ！ 安

心なさい！（とこう叫んだが、実は本当の医学士では
なかつたのである）みなさんは医学を尊敬しなければな
りません。何んとなれば医学は偉大であるからである。

それ故医学者を尊敬しなければならのである。みなさん
は素人しろうとであるから、素人は偉えらくない。不肖は医学士で

あるから、不肖の言葉は信賴しんらいしなければならん。そこで（と、彼は一段声を張りあげた）医学の証明するところによれば、寒原家の亡者は一日ぶん生き返ったのである！（と、こう言われた聴衆は彼の言葉をとっさに理解することができなかつた）諸君！ 偉大極まる医学によれば、人には往々仮死ということが行われると定められてある。今朝けさお熊さんは死んだ。これは事実である。今、お熊さんは生き返った。これも事実である。明日あす、お熊さんは死ぬのである。これまた事実以外の何物でもあり得ない。諸君、医学は偉大であるから医学を疑ぐつ

てはならない。だから医学者を尊敬しなければならん。亡者は一日ぶん生き返った！ お通夜は明晩まで延期しなければならんのである！」

おそらく我が国で医学の偉大さを最も痛切に味あじわった者は、この時の村人たちに違いない。すすりなく者もあった。よろめく者もあった。校長は、「おお、偉大な、尊敬すべき……」とこう叫んだまま、医者の手に噛かみついて慟どうごく哭した。そこで、喜びに熱狂した群衆はお熊さんの蘇そせい生を知らせに寒原家へ練りだした——が、この珍めずらしい医学的現象の結果、寒原半左右衛門は果してどうな

つたか？

「お峯や——」と、一方、それから十分ののちだが、寒原半左右衛門は門のざわめきに吃驚びっくりして女房に言いかけた。「今時分からお通夜の衆が来られたわけではあるまいな。晩飯を出すと——わしは別にかまいはしないけれど、ねえ、お峯や……」

「わたしや知りませんよ！ わたしや此家ここの御主人様ではございませんからね！ 出そうと出すまいと、あんたの胸一つですよ！」

と、こう言っているうちに、騒さわがしいざわめきは庭一

杯にぎっしりつまっていたのである。「万歳ばんざい」という声もあつた。「お目出度めでとう」と言うものもあつた。中には、「偉大なる医学」とか「我等の医学士」なぞという理解に苦しむ言葉もあつた。まったく、この村の歴史において医学が偉大であつたためしはかつてなかつたことである。半左右衛門は極度に狼狽ろうばいした。うっかりすると婚礼と通夜と取り違われたことかも知れない。なんにせよ、薄気味うすきみ悪い出来事である。そこで彼はおどおどして玄関げんかんへ出て行つたが、衝立ついたてから首を延ばしたとたん、不可解至極な歡声にまき込まれてぼんやりした。

「わしはハッキリ分らんのだが……」と半左右衛門は泣きほろめいて手近かの男に哀訴あいそした。「いったい、生きてたとかお目出度いとか、つまり何かね、わしがこうして生きているのがお目出度いということかね？ そんならわしは、わしははつきり言うが、お目出度いことはない！」

「へえ、まったくで。(と一人が答えた) 旦那だんなの生きてることなんざ、お目出度くもありませんや。ありがたいことには、旦那、隠居が生き返ったとここういうわけだね。医学は偉大でげす。ねえ、先生！」

「しかり！」と、偉大な医学者は進み出た。「当家の隠居は一日ぶん生き返ったのである。偉大な医学を信頼しななければならん！ それ故偉大な医学士を信頼しなればならんのである！」

「婆ばあさんが生き返ったと？」と、半左右衛門は吃驚びっくりしてこう訊きいたが、「あ！ 婆ばあさんが生きた！」と、今度は突然雀躍こおどりした。「婆ばあさんが一日生きた！ ありがたい。通夜は明晩にきまつたよ。婆ばあさんが一日ぶん生き返ったとよ！」

「知りませんよ！」とこの時お峯は不機嫌ふきげんな顔を突き出

した。「お前さん方はなんという呑のんだくれの極悪人の
気狂いどもだろう！　うちの婆さんは朝から仏間に冷た
くなつて寝ねているんだよ！」

「それが素人考えというもんだ！」　人々は一斉いっせいにいきり
たつて怒鳴つた。「医学というものは偉大なもの
だ！　素人に分らんからして偉大なものだ！」

「お峯や、心をしつかり持たなければならんよ」と、半
左右衛門もこう女房をたしなめた。「なにせ医学という
もんはたいしたものでな。わしらに理解のつくことでは
ない。偉い先生のお言葉には順したがわねばならんもんじゃ」

と、この言葉はなるほど語気は弱かったが、いつもに似ない頑強な攻勢を窺うことができたのである。恐らく彼は嬉しまぎれに後の祟も忘れているに違いない。してみるとこの場はお峯の敗北である。そこでお峯は棄鉢の捨科白を叩きつけるといふ最も一般的な敗北の公式に順って、自分の末路を次のように結んだ。

「何んだい、藪医者やぶの奴が！ 注射で人を殺した偉い先生があるもんかね！」

「いやいや、そういうもんでないぞ。（と。見たまえ、半左右衛門はなおも攻勢をつづけるのである！）偉い先

生のことだから患者は死ぬだけのことだ。助かったとい
もんでないか！　これが素人であつてみい、どうなるこ
とか知れたもんでないぞ」

とたんにお峯は鬼おにとなつて部屋の奥へ消え失せ
た。——半左右衛門の後日の立場は全く痛々しいものに
違くない。熱狂した群衆の中にさえ半左右衛門に同情を
寄せて、ないない気の毒な思いをした者も二三人はあつ
たのだ。ところが半左右衛門自身ときては、ますます有
頂天になりつつあつた。彼は嬉しさのあまり身体の自由
がきかなくなつて、滑りすべすぎる車のように、実にだらし

なく好機嫌になったのである。彼は揉み手をしながら、村の衆にこう挨拶を述べた。

「わしもな、ないない一日ぶんがとこ何んとかしたいと考えとつたが、医学ちゆうものがこれほど偉大のもんだとは！ なにせ学問のないわしのことでな。まさかに生き返るとは思いよらないことじやつた。なんとお目出度い話じややら……」

「旦那は孝行者じやからな。そうあろう……」と、木訥ぼくとつな一人が感激に目をうるませて叫んだ。「何よりお目出度い！ これよりお目出度いことはない！ 旦那、まず

何よりも祝いの酒だよ！」

酒！ 驚いた！ 迂闊うかつにも程ほどがあるというもの

だ！ 吃驚した群衆は慌てふためいて叫んだ。

「祝しゅくはい盃はいだ！ 隠居たんじようびの誕生日！ 酒！ 酒々々々々々！」

「しかし……」と、半左右衛門は明らかにうろたえた。

それから彼はひどくむっ！ として、

「しかし、婆さんは死んだるわな！」と言った。

「おや！ 素人の旦那が！ 旦那は何かね。自分の母親を一日早く殺そうという魂胆こんたんかね！」

と、例の木訥な農夫はほとんど怒りを表わしてこう詰なじ

った。すると駐在所ちゆうざいしよの巡査じゆんさは、群衆の陰から肩を聳そびやかして、佩刀はいとうをガチャガチャいわせたのだ。半左右衛門はしどろもどろとなったのである。

「わしは別に殺しはせんよ。婆さんは今朝から死んどるというのに。……」

「おや！ 誰が言いましたかね！」

「医者が——」

「えへん！」

と咳せき払いをして医者いしやは空を仰あおいだ。半左右衛門は口をおさえて、頬ほおに涙なみだを流したのである。進退しんたい全く谷きわまつ

たのだ。突然、しかし必死の顔をあげると、彼は物凄いものすごい形相ぎょうそうで慌ただしく群衆を物色しはじめた。そして三河屋の次郎助じろすけを見つけると断末魔だんまつまの声で、
 「次郎助や、一番安いのを一升だけ……」

だが、大變耳の悪い群衆は、次郎助へこう親切にとり
 ついでやった。

「いい酒を一樽ひとたるだとよ！」

諸君、誠実な煩悶はんもんにはきつといい報むくいがあるものだ。

こうして、誠実な村人は一日に二度の大酒盛おおさかもりにありつく
 ことができたのである。が、寒原半左右衛門といえども

決して大損はしなかった。その夜のまばゆい宴席で、彼は得意の手踊を披露することができた。昼の鬱憤うっぶんを晴らして、類たぐいのない幸福に浸ひたることができたのである。

東京で蒼白あおしろい神経の枯木かれきと化そつとうしていた私はゆくりなくこの出来事をきいて、思わず卒倒そつとうしてしまうほど感激した。全く、こんな豊かな感激と緑なす生命あふに溢あふれた物語を私は知らない。私はこの話をききながら、私の心に爽さわやかな窓ひらが展ひらくのを知った。そして私はその窓を通して、蒼空のような夢のさなかへ彷徨さまようてゆく私の心を眺め

た。生きるということは、そして、大変な心痛のなかに
 生き通すということは、こんなふうには、楽しいことなの
 だ！ そして、ハアリキンの服のように限りない色彩しきさいに
 掩おおわれているものである。私は生き方を変えなければな
 らない。そこで私は私の憂鬱ゆううつを捨てきってしまったために、
 道々興奮うめに呻きながら旅に出た。リュックサックにコニ
 ヤックをつめて。そして山奥の平和な村へ。

だが私は、目的の段々畑で、案山子かかしのように退屈たいくつした
 農夫たちを見ただけだった。私達の見飽みあいた人間、あの怖おそ
 ろしい悲劇役者がいたのである。村全体がおさまりのな

い欠伸あくびの形に拡ひろがっていた。

そこで諸君は考える。それが本当の人生だ。あの物語はあり得ない、あれは嘘うそにちがいないと。断じて！ 断々だんだんこ乎として！ あれは確かに本当の出来事だ！ 私達の慎つつしみ深い心の袋、つまりは、罪障深い良心と呼ばれるものに訊き合わしても、——いや、これは失礼！ 私自身の悪徳を神聖な諸兄に強しいたことは大変私の間違いであつたが。で、とにかく、私は異常に落胆らくたんして私の古巣へ帰つたのだが。それ以来というものは、あれとこれと、どちらが本当の人生であるかというに、

頭の悪い私にはいまだにとんと見当がつかないでいる。
ああ。

(昭和七年十月)

日本文学電子図書館

「坂口安吾 ちくま日本文学009」

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年9月25日 第2刷発行



日本文学電子図書館